

1 単元名 What' s this?

2 授業構成

(1) 教材に対する反省と新しい提案

本単元は、新学習指導要領第5学年及び第6学年の目標において、

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

に位置づけられている。また、外国語活動の目標は、三つの柱で成り立っている。

①外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。

②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。

③外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。

これら三つの柱を統合的に体験することで、中・高等学校等における外国語科の学習につながるコミュニケーション能力の素地をつくろうとするものである。

コミュニケーションへの積極的な態度とは、日本語とは異なる外国語の音に触れることにより、外国語を注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、他者に対して自分の思いを伝えることの難しさや大切さを実感したりしながら、積極的に自分の思いを伝えようとする態度などのことである。つまり、児童が積極的なコミュニケーションをするためには明確な相手意識や伝えたい自分の思いが必要である。一方的に不特定多数の相手に話したり、定例文を読み上げたりする活動ではコミュニケーションへの積極的な態度は養われないと考える。

また、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませるとは、中学校段階の文法等を単に前倒しするのではなく、あくまでも、体験的に「聞くこと」「話すこと」を通して、音声や表現に慣れ親しむこととしている。実生活で外国語を使用する必要性が乏しい中で、多くの表現を学習しても、児童の学習に対する興味・関心は高まらない。

これらのことから、本校では児童が自分の思いを持ち、外国語を用いて教師や友だちなど他者と関わる体験的活動の時間を積極的に設けていくことが重要であると考えている。具体的に児童の学習における自分の思いとは、学習の中で児童がある質問に対して自己決定したものであると考える。また、自分の思いを伝える相手が明確になることで生きたコミュニケーションとなり、伝えることの難しさや大切さを実感すると考えられる。その際、用いる外国語は児童の実体験や状況に応じてある程度絞ることで児童の学習への興味・関心を高めることができるのではと考えている。

(2) 子どもの学びの実態と期待する学び方

「伝えたい」「聞いてみたい」と思えるような活動を設定することで、児童の中にコミュニケーションへの必要感が生まれ、児童が学習に意欲的に参加できると考える。前期にALTと初めて行った学習では、母国の言葉や文化を知りたいとALTが話す言葉を一生懸命に聞こうとする児童の姿を見ることができた。ALTの話す言葉を全部分からなくても、聞こえてきた単語から話の意図を考えようとしていたのも印象的だった。また、総合的な学習の時間では、大学の留学生を招いてお互いの国の遊びや文化を交流してきた。その際には、留学生に遊び方のルールを知っている英単語を用いて説明したり、実際にデモンストレーションをしたりしながら自分たちの思いを伝えようとしていた。また、相手の国の文化について写真や動画を見せてもらいながら文化の違いや新しい発見にとっても意欲的だった。

児童がALTや留学生との出会いをきっかけとして、自分の思いを持ち、伝える相手を明確にす

ることで、児童は「伝え方」を意識すると考えられる。学習した外国語の表現だけでは自分の思いを相手に上手く伝わらない場合は、ジェスチャーなど言葉によらないコミュニケーションの手段をとろうとする姿も予想できる。それこそ「コミュニケーションへの積極的な態度」であると考え。伝える相手をイメージし、どんな伝え方をすればより自分の思いを伝えることができるのかを試行錯誤できるような児童の姿を求めている。また、明確な相手が存在しているということは、上手く伝わったかの確認や聞いてくれたことへの感謝の言葉などのやりとりも生まれてくると考える。また、コミュニケーション能力には、伝える側の態度だけでなく受け取る側の態度も重要であると考え。相手の思いを知ろうとするためには、まずは相手の言葉を注意深く聞こうとする態度が前提となる。ALTや留学生との出会いの時のように、聞こえてくる言葉を頼りに相手の意図を推測したり、確認したりするような児童の姿を求めている。

本時の学習では、身の回りの物の外国語表現を扱うことで、外来語とそのもととなる英語の音の違いにも気づかせるようにする。児童が外国語の表現を注意深く聞こうとする場の設定として、カルタ形式にして進めていく。その中で、「map」や「mat」などの発音の違いに気づけるようにしたい。思わず児童も真似してみたいくなるような活動にしたいと考えている。また、「What's this?」の表現を用いて他者と意欲的に関わろうとする活動を設定することで、自然とコミュニケーションの中に外国語が用いられているにする。活動の時間をしっかりととることで、多くの児童がコミュニケーションへの達成感がもてるようにしたいと考えている。

(3) 本時に向けての教材研究

本時では、児童がある物について積極的にそれが何かと尋ねたり、答えたりしようとする活動を中心に行う。留学生との交流のように、外国の文化にはまだまだ知らないことが無数にある。それらに直面した際に、現地の人たちに「What's this?」と尋ねられるような態度が必要であると考え。また、国際化が進む現代に生きる者として、母国の文化を尋ねられて答えられるような態度を養っていくことは価値のある活動である。本単元でのある物には学校にあるものを中心に扱い、globe（地球儀）の発音は日本語での野球の「グローブ」の発音に近く、glove（野球のグローブ）の実際の発音とは違うなど日本語と英語の類似点から言葉の面白さに気づかせていきたい。他にも、mat（体育のマット）やmap（地図）など発音が似ている物やeraser（消しゴムと黒板消し）のように複数の日本語の意味がある物などを取り上げていく。これらの発音をただ聞くのではなく、カルタ形式の活動を設定することで児童が発音を注意深く聞こうとすると考え。

また、ある物を尋ねたり答えたりする活動では、各自にカードを数枚持たせ、それが何かを尋ね、当たっていればカードがもらえるようにする。児童が用いる外国語表現は、“What's this?” “Yes, it's a ～. Good job.” や “No. But nice try!” などの比較的簡単な表現に絞ることで児童が意欲的に相手とコミュニケーションがとれるようにする。児童が活動に意欲的に参加できるように、教師とのデモンストレーションを交えながら用いる外国語表現やルールの確認を行っていききたい。

また、“What's that?” の場合も取り上げ、this と that の表現の違いにも気付かせながら、どちらも “It's ～” で答えていることを考えさせる。異なる意味の表現にも関わらず、答え方が同じであるという言葉の不思議さに触れさせながら英語への興味関心を高めていきたい。

3 単元の目標

- ・ある物について積極的にそれが何かと尋ねたり、答えたりしようとする。
- ・ある物が何かと尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しむ。
- ・日本語と英語の共通点や相違点から、言葉の面白さに気付く。

4 単元構想（総時間数 時間）

第1時 What's this? (Hi, friends! Lesson7) ①

第2時 What's this? (Hi, friends! Lesson7) ②（本時）

5 本時の学習

(1) 本時の目標

身の回りの物の名前を、進んで尋ねたり答えたりする。

(2) 準備

絵カード（掲示用、児童用）

(3) 本時の展開

学習活動	教師の支援・意図
1 あいさつをする。	○しっかりと声を出して明るくあいさつし、元氣よく活動に入るようにする。
2 身の回りの物の名前に慣れ親しむ。 ① ミッシングゲーム ② カルタゲーム shoe, ruler, notebook, beaker, glove, recorder, map, textbook, mat, eraser, brush, glove	○ゲームを通して活動に必要な言語を言ったり、聞いたりしながら発音などを確認していく。 ○“glove（野球のグローブ）”や“globe（地球儀）”など似ている2つの言葉の発音を聞き比べながら発音の違いに気付けるようにする。 ○日本語と英語の発音の違いに意識させる。
3 本時のめあてを確認する。 What's this?ゲームをしよう。	○物を尋ねるときの表現を紹介しながら、それを使ったゲームであることを伝える。
4 身の回りの物を尋ねたり、答えたりする。 What's this?ゲーム A:What's this? B:It's a shoe. (答えが当たっていたら) A:Yes.It's a shoe.Good job. B:Thank you. (答えが違っていたら) A:No.But,nice try!	○教師がゲームの流れを説明し、全体、次に児童代表とデモンストレーションを行い、確認していく。 ○児童の状況に応じて、児童と児童のデモンストレーションも取り入れる。言葉が出てこない際には、他の児童に尋ねながら全体の理解を深めていく。 ○当たっていた場合と違っていった場合の両方を想定した確認をしておく。 ○ペアでゲームを行った後、全体で活動する。手持ちのカードが無くなった児童には予備のカードを渡し、全員が活動に参加できるようにする。
① クイズのやり方に慣れる。 ② ペアで行う。 ③ 全体で行う。 ④ What's that?の場合を考える。 ・ this は近くのもの ・ that は離れたもの	○this と that の意味の違いを押さえながら、答え方はどちらも“It's ~”であることに気付かせる。
5 振り返りをする。	○児童の良かったところを紹介する。
6 あいさつをする。	